

日本臨床内科医会の取り組み

日本臨床内科医会

内藤 毅郎、菅原 正弘、望月 紘一、中 佳一、猿田 享男

慢性腎臓病(Chronic Kidney Disease, 以下CKD)は末期腎不全患者増加の原因としてのみならず心血管疾患の重要な危険因子として認識されるようになり、新たな国民病とも位置づけられている。日本腎臓学会をはじめとする関連諸団体はCKD診療ガイド作成や世界腎臓デー関連イベントの開催、各種講演会開催等、実地医家や一般市民に対する教育啓発活動を行っている。日本臨床内科医会(日臨内、会員数約1万6千名)は主として第一線のかかりつけ開業医の全国組織であるが、同会学術部腎・電解質班ではこれまで『CKD診療ガイド2009』(2009年)、『腎疾患における病診連携-地域の現状と今後の課題-』(2012年)と題した座談会を開催し、それぞれ専門家による解説もくわえて日臨内会誌に掲載してきた。また会誌上での症例検討や“日進月歩”欄での話題提供等を通じて日頃から会員のCKDに対する理解を深めるべく教育活動を行ってきた。現在、CKDの地域連携は全国的にはいくつかの先進的地域でシステム作りが先行しているが、地域連携システム構築には地域間格差があり、また非腎臓専門医のCKD診療についての認識にも個人差が相当にあるものと推測される。そこで日臨内では、CKD診療において腎臓専門医に協力するパートナーとなる“かかりつけ内科医”(非腎臓専門医)の側から見たCKD臨床の実態、地域連携の現況に関する全国アンケートを行った。本学会ではこれまでのCKD地域連携のための日臨内の取り組みを紹介するとともに、全国アンケート結果から見える問題点について考える。